

教育心理学年報 第10集

の2教科は、男女別々に成績評価されているため、男女比較の対象にならず除外することにした。

① 9教科総合成績をみると、その累積度数分布図からして、兵庫方式による内申書総計の得点分布が、3か年とも男女差なく、ほぼ同じ型の分布を示していることは大いに注目される。なお、男女間に有意差が認められなかったことから、兵庫方式は男女に公平な選抜方法であるといえる。

② 文科系教科の男女差は、国語科では圧倒的に女子が男子にまさっていることが明らかとなり、社会科は年々、男子がまさりつつあることがわかった。

③ 理科系教科では、理科が圧倒的に男子がまさっている。また、社会科とはまったく逆に、数学科が年々男女間の差がなくなりつつあることが注目された。

④ 芸能系教科では、音楽が圧倒的に女子がまさっていることが明らかとなった。

⑤ 内申書にみる行動評定では「根気強さ」、「協調性」、「向上心」が男子に、「基本的生活習慣」、「同情心」、「情緒安定」が女子に、やや高い評価の傾向がみられた以外、ほとんど男女差はみられなかった。

高校における

広瀬 博

わたしの高校で生徒指導に役立てるねらいで行なった調査を、性差の観点からまとめて報告する。調査内容は、1) 現在、過去のわたし・友人からみたわたし、父・母からみたわたし、教師からみたわたし、についてわたし自身をわたしはどのように思っているか。2) 理想的な先生像について、3) 京都教育大学付属高校の先生像について、4) 高校生活について、5) 自殺のイメージについて、6) 生活調査(クラブ・日記・話し相手・気になること・自己の存在・異性)、7) 異性を意識したのはいつごろか、8) 近ごろ(夏休み中)出した手紙について、である。また方法として特に1)~5)までについては、SD法を用いた。調査の資料を学年別・性別に整理した結果、次のような性差がみられた。

1) わたし自身をわたしはどのように思っているかについては、ほとんど明確な性差はみられなかった。

2) 理想的な先生像については、女子の方に愛情豊かな教師を理想とする傾向がみられ、また、男子においては特に3年生が、反体制的な教師を理想とする傾向が著しかった。

3) 京都教育大学付属高校の先生像については、男子は女子に比較してやや批判的な傾向がみられ、学年が上になるほどその傾向が強まっている。

4) 高校生活については、女子は男子に比べて、勉強と他の活動が両立しない。勉強を計画的にやっている。また、学校の授業は充実していると思っているなどの傾向がみられた。

5) 自殺のイメージについては、女子は男子より考えさせられるという項目において、明確な差を示し、また学年が上になるほど、女子は、自殺を清らかなものと思っている傾向がみられた。

6) 生活調査の結果については、日記をつけるものは男子に比べて女子の方が多い。話し相手については、男子に比べて女子は友人をえらぶものが多い。現在、気になることについては、男子は異性関係、女子は学業成績などが相対的に目立った。自分の存在については、男子はみんなに認められなくてもよいと思うものが、また女子はみんなに好かれたと思うものが、それぞれ相対的に多い傾向がみられた。

7) 異性を意識したのはいつごろかについては、女子は男子に比べて早くから意識しはじめる傾向がみられた。また男女ではかなり意識の内容が異なっているのではないかと思われる。

8) 近ごろ出した手紙については、男女とも友人に出した手紙が多く、また女子は男子に比べ、約2倍の数の手紙を出している。

以上、高校における性差の傾向について生徒指導を目的とした調査にもとづいて述べてみたが、高校においては、教科の選択などにみられるように、かなり性差が考慮されているように思われる。

大学における

秋葉 英 則

戦後、わが国の男女共学制度において、大学の門戸も広く両性に開かれている。そこで大学教育において性差をどのように考え、意義づけるかという問題を解決する必要がでてきた。しかし、その必要性にもかかわらず、現在大学の具体的教育の場面においてどれだけ性差が考慮されてきたか疑問に思う。また、従来の性差研究は、Maccoby (1966) の報告にもみられるように、ほとんど大学教育における性差の問題をとりあげていない。そこで、若干の調査をもとに次の4点に焦点をしばってこの